

静岡徳洲会病院

西郷・看護部長が叙勲 社会貢献に瑞宝双光章



勲章と賞状を手に笑顔の西郷・看護部長

静岡徳洲会病院の西郷美智子・看護部長が瑞宝双光章を受賞、勲章とその栄誉をたたえる賞状を受け取った。瑞宝双光章は公共性の高い職務を果たした人物に贈られる賞で、西郷・看護部長の48年にわたる看護経験、看護部長として榛原総合病院（静岡県）の立て直しに尽力した点などが評価された。

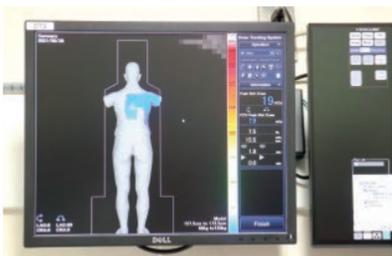
同院が徳洲会グループ入りした11年前、経営状況は低調で、また公営から民営に変わることもあり、多くのスタッフが離職していった。西郷・看護部長は、まず職員の不安を取り除くため、徳洲会のことを学び、どのような組織かスタッフに伝える役目を担った。あわせて頻りに各部署を回り、一人ひとりに声をかけ細かな悩みに対応。

さらに県内の看護学校を回り、新生した自院をアピールするとともに、看護協会からの仕事は小さなことでも断らず、同院がグループ参加後も自治体病院としての役目を果たしていることを、身をもって証明した。

「この時、多くの役をやらせていただいたことも評価していただいたポイントだったのかもしれない」と、はにかむ西郷・看護部長。徳洲会が同院の指定管理者になった際、グループ病院から20～30人の応援看護師が入り、この支えもあって3年目には逆に応援を出すほどにまで回復した。

同院ではもともと固定チームナース（チームメンバーを固定し日々の看護を行う看護方式）、プライマリーナース（1人の看護師が1人の患者さんの入院から退院まで一貫してかかわる看護方式）を採用しており、これを同院の看護の特徴としてグループ参加後も維持。

「人手が足りず、この制度を一時休止しようと思った時期もありましたが、現場の看護師から『私の患者さん』という意識をもち続けていきたいという要望が強く、堅持しました」と振り返り、現在の勤務地である静岡病院にもいづれ導入したい考え。「10年以上にわたり看護部長として働かせてくださって、グループには感謝しかありません。榛原病院の立て直しをご指示いただいた徳田虎雄・医療法人徳洲会名誉理事長にも受勲の報告をしました。今後は静岡病院の発展に尽くしたい」と意気込んでいる。



線量マッピング機能により被曝線量を可視化

体制強化に合わせて心臓カテーテル室も一新。同院がオープンした05年から使用している血管撮影装置が老朽化したため、キヤノンメディカルシステムズの最新装置に入れ替えた。同装置は血管像の視認性の向上に加え、石灰化など病変やガイド



(右から)堂前副院長、嶋田部長、田中医師、橋本裕・循環器内科部長

堂前副院長は「循環器センターの体制を強化しました。循環器内科では4月から湘南鎌倉病院で

後期研修を終えた医師2人が入り6人体制に、心臓血管外科では6月に心臓血管外科専門医資格をもつ医師が入り、専門医2人を要する3人体制になりました」とアピールする。

さらに、7月1日に急性大動脈スーパーステントワークへの登録が承認。これは急性大動脈疾患（急性大動脈解離、大動脈真性瘤破裂）の患者さ



冠動脈バイパス術を行う嶋田部長

治療実績があり、循環器内科と心臓血管外科が協力して緊急診療体制を取れる施設が対象。承認には3年間で急性大動脈

の効率的な搬送を目的に、東京都が専門施設を登録する制度。同院はその後、東京都西部の急性大動脈疾患の重症患者さんを積極的に受け入れていく考えだ。

同ネットは一定以上の治療実績があり、循環器内科と心臓血管外科が協力して緊急診療体制を取れる施設が対象。承認には3年間で急性大動脈

また、同院は2019年にハイブリッド手術室を開設。同手術室は心臓や脳の血管撮影などに対応した高性能のX線透視装置を配備、カテーテル（細い管）を使う内科的治療（血管内治療）と外科手術をひとつの部屋で行うことができる。

今後、TAVI（経皮的な大動脈弁置換術）やTEVAR（経皮的僧帽弁接合不全修復システム）などの実施も視野に入れているが、TAVIの施設基準には心臓血管外科専門医が3人必要。嶋田部長は「ただ人数を集めるためだけに専門医を入

東京西徳洲会病院の循環器センターは2009年4月、当時、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の循環器科医長だった堂前洋医師（現・東京西病院副院長兼循環器センター長）が単身で乗り込み一から立ち上げた。12年の歳月を経て着々とチームは拡大、4月から循環器内科に2人、6月から心臓血管外科に1人増員し体制を強化した。7月1日には急性大動脈スーパーステントワークへの登録が承認。同センターは今後も地域医療に貢献しながら、若手医師への教育にも尽力していく。

疾患の治療実績が30例必要だが、同院心臓血管外科は昨年だけで15例の治療実績がある。6月から心臓血管外科専門医資格をもつ岡元崇・心臓血管外科副部長が入職。嶋田直洋・同科部長は「当科で診療できる範囲も数も広がりますので、心強く思います。ネットワークに登録されたからには、地域医療に対する責務がありますので、搬送されてきた患者さんをしっかりと診ていきたい」と誓う。

急性大動脈スーパーステントワークへの登録は追い風になりま

東京都
病 院 東京西
病 院 循 内 6 人 ・ 心 外 3 人 に 体 制 強 化

急性大動脈スーパーステント登録



新しいカテーテル室で冠動脈治療を行う平光医師（左）と、指導する阿多智之・循環器内科部長（中央）

れるのではなく、症例数を増やし、当院で動きたくなる環境を整えることが大切だと思います。そのためネットワークへの登録は追い風になります」と展望する。

新型コロナウイルス 職域接種に初めて協力

武蔵野病院



院内での実施方法と同様に、打ち手が移動（手前左は大工製紙スタッフ）

武蔵野徳洲会病院（東京都）は新型コロナウイルスの職域接種に初めて協力した。依頼を受けたのは大工製紙。東京本社と近隣の関連会社社員合計1,000人に2回分の接種を行う。接種は1日当たり250人とし、7月2日に開始。医師と看護師らが東京本社に赴き、同社のスタッフと協力しながら実施している。

同院に依頼した背景について、同社の浜秀宙H&PC広域包括ケア営業部長は「もともとインフルエンザのワクチン接種などで古河総合病院（茨城県）様や羽生総合病院（埼玉県）様にお世話になり、3年前からは、より近い武蔵野病院様に行っていたいただいています。そうした関係もあり今回お願いさせていただきました」と説明。

すでに1回目の接種を終えた山本実生ダイバーシティ推進課長は「当社にとっても職域接種は初めてですが、スムーズに進んでいます。接種の日も副反応への配慮から金曜日の午後に設定していただくなど、ご協力に感謝しています」。

同院の工藤智史・看護主任（感染管理認定看護師）は「当院のワクチン外来の仕組みを活用しました」と強調。同院初の職域接種に対し「大工製紙の皆様にご協力いただき、とても助かっています」と謝意を表す。

葉山ハートセンター（神奈川県）の田中江里院長は6月28日、東京2020五輪聖火リレーの点火セレモニーに参加した。同県は6月28～30日に予定していた公道での聖火リレーを中止。代わりに聖火を受け渡すトーチキスを実施した。



トーチキスを行い、ポーズを決める田中院長

高年齢の方々など東京五輪を楽しみにしていたことから、コロナ禍前の一昨年、聖火ランナーに応募し見事当選。しかし、その後、状況が一変した。

体制強化に合わせて心臓カテーテル室も一新。同院がオープンした05年から使用している血管撮影装置が老朽化したため、キヤノンメディカルシステムズの最新装置に入れ替えた。同装置は血管像の視認性の向上に加え、石灰化など病変やガイド

「聖火リレーの中止は無念です。コロナは多くの方々の希望をこうして奪ってきたのだと実感しました」と田中院長。一方で「屋外とはいえマスクをはずす場面のあるセレモニーへの参加は、医療従事者として複雑な思いもありました」と吐露する。

葉山町はセーリング競技英国代表のホストタウンとなっている。同センターは事前合宿の間、医療面をサポートする提携を結んだ。

ワイヤーの視認性も向上、ステント強調モードも搭載し、診断・治療に有用な画像が得られる。術者の関心領域外の線量を大幅に低減する「スポット撮影」機能も装備。さらに線量マッピング機能により、被曝線量の可視化も可能だ。また、カテーテル室内では血管内の映像に加え、心電図モニターや電子カルテの情報まで集約的に確認できるようになった。

今後の展望について堂前副院長は「現在も湘南鎌倉病院や湘南厚木病院

（神奈川県）の初期・後期研修での循環器内科研修を受け入れていますが、当院は全国のグループ病院にも門戸を開いています。今後も豊富な症例と最新の設備で、若手医師の育成に力を入れていきたい」と意気軒高だ。